

「3歳児クラスの課題活動 ～アゲハチョウとの出会いを通じて～」

辰巳保育所 小森健太

①はじめに

今回の論文の内容は平成 29 年度に私が担任していた 3 歳児クラスちゅうりっぷぐみの 1 年間の活動をまとめたものである。私は平成 28 年 4 月 1 日付で辰巳保育所に異動してきたが、その年度は乳児フリーだったので、辰巳保育所で担任をするのはこの幼児クラスのちゅうりっぷぐみが初めてである。当時保育士 8 年目だった私は、2 歳児クラスからの持ち上がりである 6 年目の Y 保育士と 2 人でちゅうりっぷぐみの担任をすることになった。私は異年齢クラスや他の年齢の幼児クラス担任は経験したことはあったが、3 歳児クラス担任は初めてであった。また、Y 保育士もこれまで乳児クラスの担任だったということもあり、3 歳児クラス担任は初めてな者同士だった。保育をしていく上でお互いに思いやアイディアを出し合うことを大切に、おもしろいことを思いついた時にはすぐに伝え合いながら保育を進めていくことを話合った。

様々なあそびを通じて子どもたちと信頼関係を築いていきたい、楽しい思いを共有していきたいと思っていた頃に、アゲハチョウと子どもたちとの出会いがあった。そして、その出会いからちゅうりっぷぐみの活動が次々と展開されていった。そこでの子どもたちの活動内容を報告していきたい。

②辰巳保育所の概要

辰巳保育所は醍醐地域に位置している市営保育所である。保育所周辺には田んぼ、畑、山があり自然に恵まれている。近くには醍醐寺や三宝院、一言寺等の寺院があり、春や秋は観光客が多く訪れる地域である。地域住民で自治会組織が確立され、地域を住みやすく、子どもを守る活動がされている。毎朝学校への登校時、ボランティアの方々が「子ども見守り隊」として通学路に立ち、子どもたちを温かく見守っている。辰巳保育所は昭和 14 年 4 月に農繁期託児所として設立し、昭和 23 年に定員 50 名の保育所として認可された。現在は乳児 42 名、幼児 48 名の 90 名定員の保育所となっている。平成 30 年 4 月 1 日現在で乳児 26 名、幼児 43 名の計 69 名が在籍している。保育所全体として支援が必要な家庭が大変多いが、一人一人の子どもたちの思いを大切にしながら日々関わっている。保育士、調理師等、職員間で連携を取り合いながら子どもたちの成長を見守っている。

③春のクラスの様子

発達援助を必要とする子ども6名（男児5名・女児1名）を含む3歳児クラス15名を2人で担任している。その中で、平成29年4月からの新入児の女児が1名在籍している。子どもたちは乳児クラスから幼児クラスのちゅうりっぷぐみに進級したことで、“自分たちはお兄ちゃん・お姉ちゃんになったんだ”という喜びの気持ちを持って過ごしている。また、好奇心旺盛で色々なことに興味・関心を持って取り組むことができるのが素敵なおところである。友だちとの関わりも少しずつ増えてきていて、ままごとや園庭でのおうちごっこ、砂場あそびを通じて友だちや保育士と数人で一緒に何かを作ったり、自分が作ったものを通して楽しく遊んでいる姿が多くなってきている。また、2歳児クラスの頃から楽しんでいるむっくりくまさんやかくれんぼといった簡単なルールのあるあそびを通じて友だちとの関わりを楽しんでいる。園庭や散歩先で見つけた虫や保育所で育てている野菜や花の生長にも関心を持ち始めている。草笛に興味を持ったり、だんご虫やてんとう虫、バッタ等を見つけては手にとって観察している。

課題としては、自分の思いを言葉にすることがまだ上手くできず、友だちとトラブルになってしまった時には言葉で伝えるより先に手が出てしまう姿がよく見られる。もし言葉で伝えることができても、家庭環境の影響が大きいこともあり好ましくない言葉で思いを伝えてしまう。子どもに対する親の言葉が否定的な言い方であることも多く、子どもも同じような言い方で友だちに言う姿がある。自分のことを見てほしい、話を聞いてほしいという子どもも多く、自分のことはたくさん話したが、人の話を集中して聞くことは難しい。

④3歳児クラスの課題活動 ～アゲハチョウとの出会いを通じて～

1. アゲハチョウとの出会い ～楽しいちゅうりっぷぐみの1年のスタート～

春、園庭で友だちと一緒に砂場あそびをしたり、虫探しをして楽しんでいた子どもたち。そんなある日、子どもたちが一匹の青虫を見つけた。「はらぺこあおむし」の絵本をよく知っている子どもたちは「あっ、せんせい あおむしみつけたよ。」「これっておおきくなったらちょうちょになるんやんなあ。」と大喜びで眺めていた。子どもたちがとても興味を持って眺めていたので、飼育ケースに入れて保育室内で様子を観察できるようにした。保育室内には虫の図鑑も置いていたので、青虫に興味を持った子どもたちは友だちと一緒に図鑑を眺め、無事にちょうちょになれるかどうか楽しみにしていた。保育室の入り口付近に飼育ケースを置くことで、子どもたちは毎日登所する度に青虫の様子を観察し、

「うわー、いっばいうちでてるわ。」と自分が気づいたことを担任に教えに来てくれた。

数日経ったある日、「せんせい、あおむしがちょっとかわってる。」「あおむし、さなぎになったんや。」と子どもたちの嬉しそうな声が聞こえてきた。そんな子どもたちの嬉しそうな声を聞いていると、“このまま上手く成長してくれたらいいなあ。”という気持ちになりながら子どもたちの様子を眺めていた。数日経った週明けの月曜日、「せんせい、さなぎがちゃいらくなってるよ。」「もうすぐちょうちょになるのかなあ。」と楽しみにしている様子の子もたち。午睡前の時間に子どもたちと一緒に茶色くなったさなぎを観察してから、「もうすぐちょうちょになるかなあ。」と楽しみにしながら午睡室に向かった。

午睡が終わり保育室に戻ってくると子どもたちにとっても嬉しいことが起こっていた。なんと午睡前にはまだ茶色いさなぎだった青虫がアゲハチョウになっていたのだ。「やったー、あげはちょうだ。」「ぼく（他のクラスの友だちに）おしえてくる。」と子どもたちの嬉しそうな声がたくさん聞こえてきた。他のクラスの友だちも集まってきて、みんなが興奮した様子で飼育ケースの周りに集まりアゲハチョウを眺めていた。

2日後、朝の集いで子どもたちとアゲハチョウについて話し合った。「みんな、青虫がアゲハチョウになってよかったね。でも、このまま飼育ケースの中にいるとアゲハチョウさんは飛べないままだよね。みんなはどうしてあげたらいいと思う。」と子どもたちに投げかけた。少し考えた子どもたちの反応は様々で、「あげはちょうさんかわいそうやし、にがしてあげよう。」と言う子もいれば、「いやや、もっとあげはちょうみてたい。」「このままでいいやん。」と言う子もいた。しかし、最終的にはアゲハチョウを逃がしてあげるということで全員が納得し園庭に向かった。「それじゃ、開けるよ。」と私が飼育ケースの蓋を開けるとアゲハチョウが飛び出してきた。しかし、まるでちゅうりっぷぐみの子もたちと離れてしまうのを惜しんでいるかのように、一人、また一人次々と子どもたちの服に止まった。「ぼくたちとおわかれするのさびしいんか



やったー。ぼくたちのあおむしがあげはちょうになってる。



1ちゃんのところにとまってる。

ん。」と言う子もいた。しかし、最終的にはアゲハチョウを逃がしてあげるということで全員が納得し園庭に向かった。「それじゃ、開けるよ。」と私が飼育ケースの蓋を開けるとアゲハチョウが飛び出してきた。しかし、まるでちゅうりっぷぐみの子もたちと離れてしまうのを惜しんでいるかのように、一人、また一人次々と子どもたちの服に止まった。「ぼくたちとおわかれするのさびしいんか

なあ。」と話している内にアゲハチョウは高く舞い上がっていった。子どもたちは走って追いかけて、アゲハチョウの姿が見えなくなるまで「あげはちょうさん、ばいばーい。」と見送っていた。このアゲハチョウとの出会いは子どもたちの心に残るものであり、この出来事がこれから始めるちゅうりっぷぐみの楽しい1年間の始まりとなるものであった。

2. 「ぼくたちとあそびたいんやって。」 ～子どもたちの想像力って面白い～

Y保育士と何か子どもたちと一つのテーマを持って楽しむことはできないか話し合っていた。ちょうど今回のアゲハチョウとの出会いで子どもたちの興味が高まっていることもあり、「虫」をテーマに遊んでみようということになった。今はアゲハチョウに関心が向いているので、それを生かしてみることにした。

よく行く散歩先に桜街道という場所があるのだが、そこにある小屋の下に何故か手作りのワニがいて、子どもたちはいつも小屋の下でしゃがみこんで手作りのワニを見ている。そこに仕掛けをしたら子どもたちはどんな反応をするだろうと思い、色画用紙で作ったチョウを桜街道の小屋の下に置いてみた。子どもたちと桜街道に到着して遊び始めると、やはり何人かが小屋の方に向かっていった。後ろから着いていき子どもたちの様子を見ていると、「えっ、なんかあるで。」「せんせい、こんなところにちょうちょがいたー。」と手作りチョウを手にとってこちらにやってきた。「えっ、そうなんや。Y先生やお友だちにも見せに行こう。」と声をかけ、みんなで集まった。Y保育士が手作りチョウを手に取り耳に当ててみた。そして、「あれっ、ちょうちょさんが何か言ってる。みんなにも聞こえるかな。」と言うと、KSくんが「ぼくもきこえる。ちょうちょさん、ぼくたちとあそびたいっていつてる。」と言い出した。すると、「ぼくもそうきこえた。」「いっしょにあそびたいんやって。」と他の子どもたちにも広がっていった。とても不思議なことに、この時点で子どもたちの中で誰一人としてこの手作りチョウが本物だと信じて疑わず、何か言葉を話していると完全に信じているのだ。子どもたちの想像力は本当に面白いと感じさせられた。子どもたちには一緒に遊びたいと聞こえたとのことだったので、むっくりくまさんをして一緒に遊んだ。保育所に帰る時間になったので、「またいっしょにあそぼうね。」とみんなで手作りチョウに声をかけてからお別れをした。



ちょうちょさんがぼくたちとあそびたいっていつてる。みんなでむっくりくまさんしようよ。

「いっしょにあそんでたのしかったね。」と満足そうな子どもたち。保育所に到着しちゅうりっぷぐみの保育室に入ると、なんと壁に先ほどの手作りチョウの姿があった。子どもたちは大喜びで眺めていた。そして、「ちょうちょさん、ぼくたちともっとあそびたいんや。」「だからついてきたんや。」と子どもたちの会話も弾む。給食の時間が近づいてきたこともあり、「ちょうちょさんもおなかすいてるのかな。」と呟くHちゃんの姿もあった。このHちゃんの呟きをかわいらしいと思いながらも、次の活動に繋がる重要な一言だと感じた。

3. みんなで楽しくごはん作り ～一人一人の参加の仕方～

先日のHちゃんの呟きもあり、「ちょうちょさん、今日も何か言ってるかな。」と聞いてみると、「やっぱりおなかすいてるって。」「ごはんたべたいって。」と楽しそうに話す子どもたち。今日も子どもたちには手作りチョウの声が聞こえているようである。そこで、一緒にちょうちょにごはんを作ってあげることにした。三角や四角等様々な形に切った白画用紙をたくさん準備し、そこにクレパスで描き込んでいった。丁寧に全面を塗り込んでいる子もいれば、しっかりと形を描いてごはんやお菓子を作っている子もいた。そして、完成したものを「ちょうちょさん、ごはんどうぞ。」と食べさせに行っていた。完成したごはんは手作りチョウの近くの好きなところに貼ることになった。

描くのが好きな子はたくさんクレパスで描いて楽しんでしたが、何人かは活動に参加せずそのままごで遊んでいた。この時の私の正直な思いとしては、“みんなごはん作ってくれないかなあ。”と思っていた。しかし、この直後に私は子どもたちの姿から大切なことを教えてもらうことになる。ままごとで遊んでいる子たちの様子を見に行くと、なんとままごとの具材でちょうちょのごはんを作っている子がいた。完成すると「ちょうちょさんどうぞ。」とごはんを運んでいたのだ。この姿を見て、ままごとコーナーにいる子たちはクレパスで描くことはしなかったが、自分なりに「ちょうちょのごはん作り」という活動に参加していたのだということ、子どもたち一人一人に色々な参加の仕方があるのだなということを感じさせられた。子どもたちが作ったごはんが増えてくるとまた新たに手作りチョウを準備した。チョウが増えたことが子どもたちの喜びとなり、「ごはんおいしいっていってる。」「おともだち



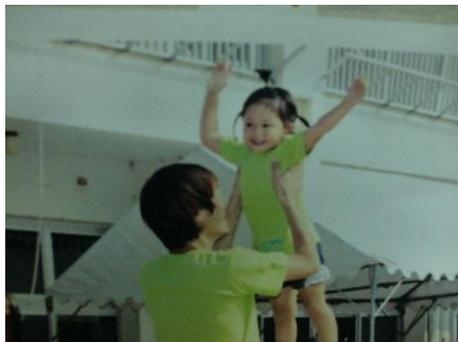
ちょうちょさん、ごはんどうぞ。

もごはんたべたいのかな。」とまた作ってみようという意欲に繋がっていった。ちなみに、ごはんではないのだが、ままごとで使う道具をチョウの形に組み合わせて楽しんでいるHちゃんの姿があり、それを嬉しそうに見せてくれる姿がかわいかった。

4. 初めての運動会 ～どんなふうにとびたのかな～

子どもたちにとっての初めての運動会が近づいてきた。子どもたちがここまで楽しんできた虫をテーマにしてきたあそびを通じて、子どもたちが好きな虫に変身して運動あそびを楽しめたら面白いかもしれないなとY保育士と話し合った。これまではちょうちよにごはんを作って楽しんでいたが、他の色々な虫にもごはんを作ってあげたいという思いが子どもたちから出てきた。子どもたちと話をしていく中で、ジュース、アイス、かき氷、チョコレート、ぶどうを作ることにした。模造紙や画用紙に絵の具やクレパスで描いて作っていったが、これまで自分一人でごはんを作る時にはあまり参加していなかった子も「ぼくもいっしょにする。」と言って、友だちと一緒に作るのを楽しんでいた。

また、普段のあそびで担任に抱きかかえられながら飛び立つあそびを繰り返していく中で、担任との一体感や抱きかかえてもらえる心地良さ、自分のタイミングだけでなく担任と気持ちを通わせながら飛び立つことの楽しさを感じた子どもたちから「せんせい、も



運動会本番、「わたしはちょうちよにへんしんするの。」と笑顔で私の手から飛び立つYRちゃん。

ういっかいしよう。」と楽しそうな声がたくさんあったので取り入れることにした。運動会当日、坂を上って私の方に向かってくる子どもたちの表情からは「きょうはどんなふうにとびたのかな。」と楽しそうにイメージを膨らませて生き生きとしている様子が伺えた。そして、私に抱きかかえられて高く飛び上がると、それぞれに思い思いの自由な表現をしながら私の手から飛び立っていった。子どもたちの自由な表現を私自身も嬉しい気持ちになりながら見守った。

5. 劇あそび「むしむし村のお医者さん」 ～Kくんと母の思いを受け止めて～

寒い日が続くようになり、室内あそびをして過ごす時間が増えてきた。子どもたちの中でお医者さんごっこを楽しむ姿があり、医者役と患者役を交代しながら楽しんでいた。ペ

ープサートで遊んだり、「ねこのおいしゃさん」の替え歌を歌って楽しんでいた時に、「むしさんもびょうきになるのかな。」「むしさんのおいしゃさんっているのかな。」といった子どもたちの呟きがあった。そういった子どもたちの楽しんでいる様子が生活発表会の劇あそび「むしむし村のお医者さん」に繋がっていった。そして、劇あそびの役を決める時、子どもたちに好きな虫を聞いていくと、だんご虫、ちょうちょ、あおむしが出てきた。このように子どもたちと虫をテーマにここまで楽しんできたが、保育を進める中で悩んだこともあった。この生活発表会の場面ではあおむし役のKくんスポットライトを当てて一つのエピソードを紹介したい。

<Kくんの普段の様子・背景>

Kくんは母子家庭であり、母と2人で生活している。Kくんはしょうがい名は特についていないが発達に課題を抱えており、保育所では加配がついている。母に保育所での様子を伝えてはいるものの、母としては本児の発達に関してあまり触れてほしくないようにも感じられる。Kくんの特性としては、初めてすることや慣れていないことに強い不安を感じることや、自分の思いを言葉で伝えることができずにすぐに手を出してしまい、トラブルになることが非常に多いことが挙げられる。運動会でも本番を迎えるまでの様子として、「Kはせえへんし。」となかなか出たがらなかったり、運動会当日は友だちと一緒に参加したものの、途中で保護者席の母を見つけて向かっていく姿があった。母はKくんが他の友だちと違う動きをしてしまうことを受け入れられないでいるのかなと感じながらも、そういった思いを保育士に相談できずにいた。そんなある日、Kくんが友だちとトラブルになったことがきっかけで、母はKくんや担任に強く当たってしまうことが多くなり、私は母がKくんを感じている思いを受け止めていこうと思った。

<エピソード> ~笑顔いっぱい「それでは きあいをいれましょう」~

生活発表会に向けて劇あそびに取り組んでいる中、友だちが楽しそうにしているのに対し不安そうな様子を見せているKくん。友だちとトラブルになることも多く、「Kはせえへんし。」と楽しめずにいる姿もよく見られた。Y保育士や所長、副所長とどうしたらKくんも一緒に楽しめるか話をした。そこでは、Kくんがその日の気持ちでいたいと思う役を選べるようにしてあげることで安心して友だちと一緒に参加できるのではないかと話し合った。しかし、Kくんが選んだ役が虫役ではない場合があることを、クラスの子どもたちやKくんの母に説明する必要があると思った。「Kくんはあおむし役なんやけど、ちょっとドキドキしてしまうこともあるみたいやねん。もしかしたら、Y先生と一緒にお

医者さんをするかもしれないけど、みんなはそれでもいいかな。」と子どもたちに聞いてみた。「Kくんだけずるい。」「ぼくもYせんせいといっしょにおいしゃさんしたい。」と言う声があるかもしれないと思ったが、子どもたちからは「せんせい、だいじょうぶやで。」と返ってきた。子どもたちがKくんのことを少し理解してくれたような気がして、温かい気持ちになった。

それからの劇あそびではKくんはY保育士と一緒に医者さん役をすることが多くなった。Y保育士が側にいるという安心感から、Kくんも自分の持ち味を出して楽しむ姿が増えてきていた。しかし、母にKくんが医者さん役を楽しんでいる様子を伝えると、自分の子どもだけ他の友だちと違う役をすることに納得がいかない様子であった。そんな母の思いを受け止めながら引き続き本児の思いや様子を伝え続けたが、生活発表会前日も「K、明日はちゃんとあおむしやりや！」と言って帰っていった。

そして迎えた生活発表会当日、私とY保育士は笑顔でKくんの母に声をかけた。しかし、Kくんの表情は浮かない様子である。生活発表会が始まり、ちゅうりっぷぐみの劇あそびの時間が迫ってきた。Kくんに声をかけると、「かあちゃんがあおむしやれっという。」と話し始める。「KはYせんせいといっしょにおいしゃさんをやりたい。でも、おかあさんのいうとおりにあおむしやくをがんばるべきなのか。」といったKくんの心の葛藤が感じられた。そこで医者さん役のY保育士が「Kくん、一緒に医者さんしようよ。」と優しく声をかけた。Kくんも心の重荷が取れたように笑顔で「うん。」と答え、医者さん役の準備をしてホールに向かった。

劇あそびが始まると、KくんはY保育士と一緒に安心した表情ではあったが、少しの緊張も感じられた。何度かやりとりを繰り返す中で次第に笑顔になっていった。3つ目の虫が登場した時、Kくんが急にY保育士の口をがばっと押さえた。「Kがひとりという。」自信に満ち溢れ、堂々とセリフを言うKくん。不安に感じていたことを忘れるくらいに楽しんでいる姿に嬉しくなった。生活発表会終了後、Kくんの母に「Kくん、今日はとっても楽しそうでしたね。」と声をかけた。Kくんの母は「そうですか。」と愛想のない返事だったが、その表情は笑顔だった。Kくんの母にとって望んでいた姿とは違ったのかもしれない。しかし、Kくんの生き生きとした姿を見て母の不安が解消されたと思う。このエピソードを通じて、担任が子どもの心の奥にある思いを感じると同時に、保護者の思いも汲み取りながら関わっていくことの大切さを感じることができた。

6. 生活展 ～みんな違ってみんな良い～

辰巳保育所では子どもたちの作品や絵画に加えて、子どもたちのあそびの様子や食育活動の様子の写真も展示する生活展がある。この1年間、アゲハチョウとの出会いから始まり、描画活動、運動会、生活発表会等虫をテーマに楽しんできたので、みんなで「むしむし村」を作ろうということになった。これまでは描くことでちょうちょのごはんを作ることを楽しんできたが生活展では紙粘土や廃材、自然物等、色々な素材を使って、ちょうちょの友だちやごはんを立体的に表現できるようにした。

子どもたちも自分なりに材料を組み合わせるのを楽しんでいて、それぞれにユニークな作品ができていった。紙粘土は主にごはん用に準備していたが、Hちゃんは紙粘土やモール、ストロー、自然物を組み合わせて、「せんせいみてー。Hちゃんはちょうちょさんがあそべるように こうえんをつくったよ。これがてつぼうでね。」と嬉しそうに説明してくれた。また、お菓子やティッシュの箱ではちょうちょの友だちということで、クワガタやカブトムシ、かまきり、てんとう虫等を作っている子がいたが、こちらでも面白い作品ができていた。生活発表会の時にY保育士とお医者さん役をしていたKくんは「Kはごみばこつくってん。みててな、ここがあくから ごみいれられるねん。」と言う姿があったり、I Rちゃんはたくさん材料を繋げて、「なんかみえるやつ」というものを作っていた。他にもASちゃんは「スーパーロボット」を作る等、それぞれに自由な表現が見られた。虫をテーマにと活動の導入時に子どもたちには話していたが、そこはまだ3歳児。その時に思いついたものを作っている子の姿もたくさんあったが、その子の個性が十分に出ていてよかったと思う。作りながら様々な発想が生み出されていく姿があり、一人一人の個性的な作品が少しずつ仕上がっていった。また、色々な作品が集まったことで、「Y Rちゃんのすごいね。」「これ、どうやってつくったんやろう。」と友だちが作った作品に関心を持ったり認め合ったりする姿が見られた。子どもたちの作品は「みんな違ってみんな良い」のだと感じさせられた。

完成したものはしばらくの間ちゅうりっぷぐみの保育室に生活展コーナーとして置いていた。Hちゃんは手作りチョウを自分が作った公園のところに置いて、「ほらせんせい、ちょうちょさん こうえんたのしいっていつてるよ。」と言ったり、Yくんは自分が作ったごは



んのところに手作りチョウを置いて、「Ｙくんのごはんおいしいってってる。」と楽しむ姿があった。そして、生活展前日にホールに作品を運んで展示した。最後の仕上げとして子どもたちが普段楽しんでいる積木でむしむし村を作った。子どもたちが 1 年間楽しんできた思いが詰まった、子どもたちも担任も大満足のむしむし村がこうして完成した。

⑤おわりに ～やっぱり保育はおもしろい～

春のアゲハチョウとの出会いがあったことで、この 1 年間は虫をテーマに様々なあそびを楽しむことができてよかった。私自身も初めて 3 歳児単独のクラス担任をするということで、どんなことをしていけば子どもたちと楽しめるのか悩んだこともあったが、Ｙ保育士といつも楽しく話し合いながら保育を進めることができて本当によかったと感じている。

3 歳児クラスの子どもたちは色々な方向に興味に向く年齢であるので、1 年間同じテーマで続けて遊んでいくのは難しいのではないかと感じていた。しかし、今振り返ってみて思うのは、クラスに一つのテーマがあることで、それを通じて共通の話題で楽しむことができた。この論文の序盤で春のクラスの様子を紹介した中に、すぐに手が出てしまったり、好ましくない言葉で思いを伝えてしまう、人の話を集中して聞くことが難しいという姿があった。そんな子どもたちがこの虫というテーマがあったことで一緒に遊ぶことを楽しんだり、友だちを身近に感じて一緒にいることが楽しいと感じたり、お互いのことを認め合うといった成長が見られた。3 歳児クラスでも課題活動を楽しめたことは、私たち担任にとっては非常に大切な経験となった。

そして、私自身にとって何より大きかったのは、1 年間子どもたちと遊んできて、“やっぱり保育はおもしろい”と改めて感じることができたことだ。平成 30 年度を迎えて、子どもたちは一つ進級して 4 歳児クラスももぐみとなり、私とＹ保育士は 2 人とも持ち上がりで担任をしている。そして、また新たに子どもたちは興味を持てるものを見つけてあそびを楽しんでいる。“やっぱり保育はおもしろい”という気持ちを大切にしながら、今後も子どもたちと楽しいことをしていきたい。そして、あそびの中で子どもたちが繋がりあい成長していく姿を見守ることができたらと思う。

